

ピアノの時間 —— 三浦友理枝 (ピアノ)

曲目解説

ショパン：雨だれ 《24の前奏曲》 op. 28 より)

ショパンの《24の前奏曲》は、静養先だったスペインのマヨルカ島で1839年に完成。「雨だれ」はその第15番で、ショパンの前奏曲のなかでも特に知られた1曲である。

C. シューマン：ロマンス イ短調

クララ・シューマンが親友ロザリー・レーザーのために作曲した小品。1853年、クララは4つのロマンスを作曲したが、このイ短調だけは「3つのロマンス」作品21に組み込まれなかった。全体は三部形式で、ロマンティックななかにも儚さを感じられる。

シューマン：トロイメライ 《子供の情景》 op. 15 より)

シューマンが1838年に作曲した《子どもの情景》は、子どものために書かれた曲集とはいえ、高い芸術性を誇る。その第7曲「トロイメライ」は単独でもよく演奏される作品。「トロイメライ」とは、ドイツ語で「夢見ること」という意味。

シベリウス：もみの木 《5つの小品（樹木の組曲）》 op. 75 より)

1914年に作曲された《5つの小品》は、シベリウスの故国フィンランドの風景に特有な樹木を描いた曲集で、「樹木の組曲」として知られる。その第5曲「もみの木」は特に有名で、この木に対するシベリウスの思いがあふれている。

H. カスキ：秋の朝 《3つの断片》 op. 21 より)

フィンランドの作曲家ヘイノ・カスキは、知名度は低いものの、美しい抒情が漂う作品を残した。本曲は1920年頃に作曲された《3つの断片》の第2曲。日本の秋とは違い、これから長い冬をむかえんとする、透き通った冷たい空気の朝である。

スクリャービン：左手のための前奏曲とノクターン op. 9

1894年のモスクワ音楽院時代、スクリャービンは練習のし過ぎで右手首を故障した。本曲はその回復を待つ間に作曲された、左手のための作品。前奏曲とノクターン（夜想曲）からなり、ショパンの影響も感じられるロマンティックな曲である。

ラフマニノフ：鐘 《《幻想的小品集》 op. 3 より》

《幻想的小品集》は、モスクワ音楽院ピアノ科を卒業した翌年の 1892 年に完成。その第 2 曲にあたる嬰ハ短調の前奏曲は、「鐘」という別称で親しまれている。ラフマニノフの作品のなかでも演奏機会の多い名曲である。

ドビュッシーの作品

4 曲からなる《ベルガマスク組曲》は、1905 年に出版されたドビュッシー初期のピアノ作品。その第 3 曲「月の光」は、様々な楽器用にも編曲され、親しまれている。「亜麻色の髪の乙女」は、ルコント・ド・リールの詩をもとに 1910 年に作曲された名品。「夜想曲」は 1892 年作曲。ドビュッシーの夜想曲としては管弦楽作品が有名だが、こちらはピアノ独奏のための夜想曲である。

サティ：ジムノペディ 第 1 番

サティが 1888 年に作曲したピアノ独奏曲。《ジムノペディ》は第 3 番までであるが、特に第 1 番はサティの代表曲として知られる。愁いを含んだ 3 拍子のリズムが不思議な印象を醸す。「ジムノペディ」という題名は、古代ギリシアの祭典に由来する。

プーランク：エディット・ピアフを讃えて 《《15 の即興曲》より》

《15 の即興曲》は、プーランクが 30 年近くにわたり書いてきた即興曲をまとめたもの。1959 年に作曲された第 15 番には「エディット・ピアフを讃えて」という題がつけられており、ピアフの歌のように切なく、美しい。

ラヴェル：亡き王女のためのパヴァーヌ

1899 年にラヴェルが書いた傑作。「亡き王女」のモデルは 17 世紀のスペイン王女マルガリータと言われているが、葬送曲というわけではなく、「昔のスペイン宮廷で小さな王女が踊ったパヴァーヌ」といった意味。ルーヴル美術館にはベラスケスが描いたマルガリータ王女の肖像画があるが、ラヴェルもそれを見たという。

F. モンポウ：《内なる印象》より

スペインの作曲家フェデリコ・モンポウが 1911～14 年に作曲した《内なる印象》は、モンポウ初期を代表する曲集。レントで始まる「第 1 曲」は、しみじみと内面へと潜っていくような感覚がある。第 8 曲「秘密」は、静謐さ、繊細さ、内面性といったモンポウの特徴が凝縮された 1 曲。曲集の最後を飾る第 9 曲「ジプシー」は、心地よい旋律が風のように流れていく。モンポウのジプシーに対する優しさが表れた曲である。